

上野峠を巡る

●白雲ライン／展望台 ●虎尾桜 ●白糸の滝

福智山誕生とその植生、展望台から裾野に広がる福智町の地形を見る。

福智山の移り変わり

「この枝を揺らすとほら、いい音がするでしょう、これはソヨゴ。あの木はシャシヤンボですね、地元でミソソチヨと呼ばれ、わたしも食べましたよ。実はブルーベリーのような味がするんですよ。」

福智山の先生と歩くとは話は尽きない。聞き入るうちに歩く疲れも忘れてしまうほどだ。今回、福智山の植生と地形に詳しい熊谷信孝さんに案内をお願いした。

先生の説明によると、福智山は、茶色つぼい花崗岩の上に青みがかった変成岩古代層がのった地層となっている。かつて、地下のマグマが堆積層を押し上げた際、その熱により堆積層は溶けて変成岩となった。だから福智山では石灰岩を含めて化石は見られない。福智町側には福智山断層があり、これができた時、一方は隆起して福智山塊に、他方は沈降して平野となっている。そのため断層のある福智町側は浸食されて急傾斜であるが、反対の北九州市側は緩やかな傾斜になっている。そんな福智山誕生の話聞きながら白雲ラインを行く。やがて展望台へとたどり着いた。



「熊谷信孝さん（上野）、高校教師を経て白赤地町文化財専門委員長、虎尾桜を心配する世話人会会長、探検会会長などを務める。「英彦山地の自然と植物」一冊、福智山地の自然と植物」など著書多数。



↓魚のコバンザメのように木に宿る「ヒノキバヤドリギ」も見られた。



↑白雲ラインで真っ先に迎えてくれた「ヤブツバキ」、緑の中に赤が映える。



↑福智山の展望台、中腹よりやや上、白雲ラインから横に入った所にある。近くには弘法岩などの奇岩もみられる。↑展望台から福智町を望むと、ここが扇状地であり、盆地であるという地形がすぐに確認できる。



↑満開時の虎尾桜。推定樹齢600年、高さ23m、幹周り3.83mの巨桜。エドヒガンという希少種で緋色（濃いピンク）の花が特徴。

↓3月12日、雨天時に行われた「虎尾桜を心配する世話人会」の桜の治療。菌による幹の腐食が進んでいるため、「呼び接ぎ」と呼ばれる治療の準備を行った。別の3本のエドヒガンと成長する形成層同士を融合させる作業だ。3本が根付いたのを確認して夏までに治療を施す。これが成功すれば虎尾桜の支えになるばかりでなく、養分も行き渡る。



展望台から福智町を望むと、ここが扇状地になっているのがよく分かる。気の遠くなるほど昔、縄文時代ごろには遠賀湾がこのあたりまで入り組んでいたと考えられている。実際に直方市では貝塚が発見されている。

今ではスギやシイの木ばかりになった福智山だが、かつてはアカマツが多く繁殖し、上野焼の焼成時の燃料としても用いられていた。昔はマツタケもよく採れたという。中腹より上では往事のアカマツ林の面影が残っている。このような移り変わりは、希少種の存在を危うくする。高木により日光が遮られ、ゲンカイツツジなどの絶滅危惧種が少なくなってきたのだ。希少種ほとんどは植生の遷移で消滅するという。近年のモウソウダケの急繁殖も気がかりなところだ。

しかし、福智山には豊かな自然が残されている。エドヒガンの巨木、推定樹齢600年の「虎尾桜」をはじめ、町内では国の絶滅危惧種が23種、県の絶滅危惧種が36種生育している。特に「虎尾桜」は「虎尾桜を心配する世話人会」のボランティア活動で、枯死寸前から息を吹き返した桜だ。この広報紙を発行するころには、鮮やかな花をつけていることだろう。年々知名度も上がり、毎年多くの花見客がその姿を仰ぎ見るまでになった。また、景勝地である「白糸の滝」、「弘法岩」などの奇岩も訪れる人の目を和ませる。



↑虎尾桜が開花する時期とはほぼ同じころに咲く希少種のゲンカイツツジ。上野峠の険しい花こう岩の岩場に生育する。大陸系の植物で、3月下旬から4月上旬に開花する。



↑上野峠にある落差25mの白糸の滝。この滝を中心に福智川流域の約3kmの峡谷が上野峠と呼ばれている。松尾芭蕉の高弟志田野坡が門人として訪れ、「投入れて滝見顧なり折腰」の句を残している。

↑弘法の雨降り石とも呼ばれ、弘法大師の姿が映ったものだ地元で伝えられている「弘法岩」、右の写真は左から「カブト岩」「コロモ岩」、山肌を姿を見せている奇岩である。

